

〔農 作 概 況〕

昭和41年産水稻の作柄概要

1. 作付の概況

昭和41年産水稻の作付面積は別表に示すように九州の合計で423,100haで前年にくらべ900ha減少し、福岡県の減少が700haで最も大きく、他の県は100～200ha内外で、熊本では300ha、宮崎では200ha増加

している。

早期栽培は34,628haで総作付面積の8.2%にとどまり主として宮崎・鹿児島両県で74%を占めている。

佐賀県での「米づくり」運動にじげきされて、他の各県でも米増産技術の普及対策として稲の集団栽培が増加し、佐賀県では作付面積の23%に当たる12,500ha、次いで福岡・熊本が4,000～6,000haで、九州全部で25,440haに達している。

九州ならびに各県別の水稻収穫量と被害量

県 別	作 付 積			10 a 当り 収 穫 量			40年収穫量との差	10 a 当り 作 況 数			左表の内早期栽培			集 団 裁 培		
	ha	kg	t	ha	kg	%		作付面積	10 a 当り 収 穫 量	収穫量	個 所	面 積	効 果			
福 岡	92,800	484	449,200	34,100	427	113.3	91	371	338	76	3,880	大				
佐 賀	54,700	542	296,500	15,400	459	118	1,490	397	5,920	500	12,500	大				
長 崎	32,000	374	119,700	0	347	103	2,940	333	9,790	9	240	大				
熊 本	76,600	470	360,000	45,600	407	115.5	4,210	366	15,400	453	6,000	大				
大 分	53,300	382	203,600	2,400	375	102	197	319	628	236	2,620	大				
宮 崎	49,000	340	166,600	▲6,200	316	108	13,000	364	47,300	7	280	大				
鹿 児 島	64,700	338	218,700	▲5,200	368	100	12,700	280	35,600	—	—	大				
九州合計	423,100	429	1,814,000	86,000	390	110	34,628	332	114,976	1,281	25,440	大				

県 別	被 害 総 数		気 象 被 害 量		病 害 量		虫 害 量	
	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量
福 岡	165,700	19,700	13,900	6,230	85,200	7,220	65,000	6,080
佐 賀	50,000	9,420	11,700	5,040	23,200	2,470	15,100	1,910
長 崎	46,800	17,000	14,600	11,200	14,400	2,070	17,700	3,760
熊 本	107,000	18,300	15,500	6,530	50,900	7,250	40,500	4,360
大 分	73,200	21,800	23,400	13,300	27,800	3,570	21,800	4,740
宮 崎	140,100	27,600	28,100	15,300	76,000	8,870	35,800	3,390
鹿 児 島	235,800	44,500	24,800	8,490	113,800	20,000	94,800	15,800
九州合計	818,600	158,320	132,000	66,090	391,300	51,450	290,700	40,040

(注)被害面積は延面積である。

2. 作 柄 概 要

本年稲作期間気象の特徴は、北九州では7月3半旬～9月3半旬の間、8月下旬に一時やや寡照であった外は連日30℃を越す程の晴天つづきであった。南九州でも8月2半旬迄は高温。多照で、8月中、下旬に台風15号(8月23日)の影響で一時低温、寡照の時もあったが、9月上旬は、高温・多照に経過した。

登熟期間は登熟中期の9月下旬が、台風24号(9月24日)の影響で九州全域共低温、寡照に経過したが、10月に入り気温はほぼ平年並でやや多照に経過した。

以上のような気象経過のため、分けつは高位まで多発したので有効茎歩合は低下したがm²当有効穂数は分けつ期に水害と「うんか」の被害を受けた鹿児島を除いて、ほとんどの県が充分確保され、北九州のほうが増加率は高かった。

全般的に高位分けつの多い穂数構成でしかも穂数の増加にもかかわらず、粒数決定期の好天候に恵まれて分化数が多く退化が少なかったため、一穂全粒数も平年より増加した。このためm²当全粒数では大部分の県が平年より10%以上増加し特に北九州の増加が大きかった。

9月上旬が九州全域共特に高温・多照のため出穂開花は極めて順調で、このため初期の登熟は全粒数の増加にもかかわらず平年より良好であったが、9月中下旬が低温・寡照のため登熟は一時遅延した、しかし後期の多照で登熟は挽回したが登熟日数は平年より5日前後延長した。登熟は中生が晩生より良好であった、このため中生の短稈穂数型品種の作付が多い北九州が南九州よりも良好であった。南九州は減数分裂期の不良天候のため花器の発育不良のためか、宮崎ではオオ

ヨド、鹿児島では農林18号に不稔粒の発生が多く、また台風の接近による風雨のため倒伏、変色粒等の発生で登熟は北九州より悪かった。

しかしm²当全粒数が充分確保されたので、九州の10a当取量は豊作であった前年の408kgを大きく更新して429kgを記録し、全国平均を29kgも上回る大豊作となった。県別には大分を除く北九州各県の増収が目立ち、なかでも、佐賀・福岡・熊本ではホウヨク、コマサリ、シラスイ等の急速な普及による密植多肥化と病虫害防除の徹底ならびに集団栽培の増加による増産技術の平準化により、近年における取量の増加は目ざましく、特に佐賀県では前年の512kgを、さらに30kg上回る542kgという驚異的な記録で2年連続全国一位を占め、福岡は484kg、熊本が470kgで、それぞれ第4位、第5位を取る取量を記録した。

九州各県の陸稲収穫量と被害量

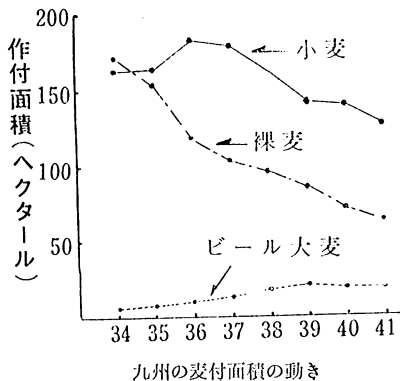
県別	作付面積		10a当り収量		40年取収量との差		作況指数	被害総数		気象被害		病虫害		虫害	
	ha	t	kg	t	t	%		被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量	被害面積	被害量
福岡	107	89	95	▲62	71	152	48	106	45	28	2	18	1		
佐賀	90	106	95	▲52	75	155	46	94	44	27	1	34	1		
長崎	882	29	256	▲1,070	20	1,310	1,170	1,170	1,150	40	8	95	8		
熊本	7,850	122	9,580	▲1,420	75	9,480	6,200	6,460	5,900	1,680	167	1,340	135		
大分	2,790	151	4,210	1,250	103	2,890	456	2,110	385	691	66	59	3		
宮崎	3,170	180	5,710	▲210	102	8,300	1,190	3,770	851	2,730	214	1,530	94		
鹿児島	7,490	136	10,200	▲3,200	81	20,100	4,950	8,070	3,210	5,180	407	6,210	1,290		

分、宮崎の中山間地帯では8月中旬の台風の影響による降雨で干ばつ解消が他の地帯よりも早かつたので干害の程度も比較的軽らく、作柄は別表に示すように平年を僅かに上回る作況指数を示している。

麦類

作付概況

全国の実とり用4麦の作付面積は、昭和25年の180万ヘクタールをピークにその後漸減の方向をたどり、と



昭和41年産陸稲の作柄概要

1. 作付の概況

近年における陸稲の作付面積は全国的に減少の方向をたどり、九州でもその例にもれず前年にくらべ765haの減少を示し、主産県の鹿児島への減少が最も大きく860haの減少を示しているが、熊本が310haの増加をみている。

2. 作柄概要

北九州では7月中旬から9月上旬まで南九州でも7月中旬から8月上旬まで連日の晴天つづきで、著しく降雨が少なく、各地に干害が発生し、中でも主産県の熊本では県北の主産地帯、天草地方、鹿児島県の台地地帯は大干ばつに見舞われ、青立ち、出すくみ、登熟不良等により作柄は著しく低下したが、九州東部の大

くに35年以降は急激に減少し、41年は80万9,100ヘクタールで25年の50%以下に低下した。九州地域でも下図のとおり減少をたどり、41年も前年に対して2万1,316ヘクタール(10%)減少した。前年まで増加していたビール大麦は南部九州では増加しているが北部九州での減少が大きく1%ではあるが減少している。作付減少の理由としては、労力不足、低収益性が主な理由であるが、九州では水稻の収穫期遅延は種期の天候不良もあげられる。

第1表 昭和41年産麦類作付面積(全国・九州) 単位 ha

麦別	作付面積		同前年比較(対差)	
	全国	九州	全国	九州
小麦	421,200	128,700	▲54,700	▲14,000
大麦	115,200	698	▲16,700	▲63
ビール大麦	110,200	19,000	▲3,100	▲103
裸麦	162,500	62,700	▲14,500	▲7,150
4麦計	809,100	211,098	▲89,000	▲21,316

▲印は減少を示す。

作柄概況

は種期は、水稻の収穫期遅延とその後の天候不順のためおくれた。生育初期は、は種期のおくれと、12月の低温、寡照のため悪く、分けつ期間の1月は気温の

変化が大きく、2月に入ると急激な気温の上昇により充分な分けつの発生をみずに早立ちとなつたため、穂数は平年より少なかった。穂数の構成をみると、主に主稈と一次の1・2号分けつで構成されているので、穂は大きく粒数も多くなるものと考えられたが、2～3月の高温とくに3月始めの異常な高温と多雨により地上部と地下部の生育不均こう、出穂前後の低温などが影響して粒数も減少した。登熟期は好天がつづき粒の充実は良好であったが、小麦では登熟中期頃より、

第2表 昭和41年産麦類別10a 当り収量および作況指数

県別	小麦		大麦		ビール大麦		裸麦	
	収量	作況指数	収量	作況指数	収量	作況指数	収量	作況指数
福岡	192	71	159	92	246	92	221	92
佐賀	189	70	225	87	227	81	237	85
長崎	126	47	157	84	221	97	208	74
熊本	132	62	192	94	204	89	198	90
大分	223	82	241	110	281	102	286	103
宮崎	136	81	179	90	233	109	164	88
鹿児島	134	85	141	108	206	108	161	92
九州	166	70	208	100	214	99	208	88
全	243	94	333	105	297	102	242	94

黄銹病、黒銹病が、九州全地域に発生し、とくに長崎県、熊本県は多かった。このため登熟後期になって小麦の作柄は急変し、九州地域の作況指数は第2表のとおり70%に低下した。成熟期の早い大麦、裸麦は被害が少なく登熟は概ね良好で、6条大麦、ビール大麦は平年並、裸麦は88%であった。

昭和41年産かんしよの収穫量と被害量

県別	作付面積	10a 当り収量	収穫量	作況指数	被害量			
					被害面積	被害量	被害率	
福岡	2,120	1,550	32,900	101	▲ 4,500	1,620	1,840	5.6
佐賀	2,020	1,830	37,000	96	▲ 6,800	2,050	6,170	16.1
長崎	20,300	1,760	357,300	94	▲ 36,800	19,900	61,100	16.1
熊本	11,600	1,900	220,400	100	▲ 10,200	15,200	27,500	12.5
大分	4,140	1,610	66,700	96	▲ 5,400	2,500	5,970	8.6
宮崎	26,000	2,070	538,200	96	▲ 59,400	39,200	69,500	12.4
鹿児島	64,400	2,170	1,397,000	101	▲ 36,000	107,300	118,500	8.6
九州合計	130,600	2,030	2,650,000	99	▲ 87,000	187,800	290,600	10.8

春植えばれいしよ

作付面積：全国計では前年に対して、北海道の減少(13%)が大きくひびき1万6,900ヘクタール(8%)減少したが、九州では僅かであるが100ヘクタール増加した。

作柄：北海道では植え付けのおくれと、いも肥大期の天候不順、疫病の発生で不作であったが、九州地域は全国で最も良く作況指数109%の豊作であった。これはいも肥大期の5月が多照、寡雨に経雨したため肥大良好で、例年発生する湿害、疫病の被害が極めて少

昭和41年産かんしよの作柄概況

1. 作付の概況

九州の合計作付面積は別表のように130,600haで、前年にくらべて約3,600ha減少し、主産県の長崎で10000ha、熊本600ha、宮崎が800ha、づつ減少し、他の県もそれぞれ100～450ha減少している。

2. 作柄概況

挿苗期は全般的に平年よりやや早まり、挿苗後も適雨に恵まれて活着は良好であったが、南九州では7月上旬の集中豪雨で根部の露出や、流失、埋没等の局部被害もみられた。7月中旬以降は九州全域共晴天つづきで干ばつとなり干ばつとなり干害により地上、地下部共生育は抑制されたが、鹿児島では8月中旬の台風による降雨で干害は解消し、いもの肥大も挽回したが、宮崎の沿海砂質地帯や傾斜畑、挿苗のおくれた地帯は干害が大きく、北九州でも9月上旬までの干ばつ干害は大きかった。

9月中下旬の台風による降雨で九州全域共干害は解消し、10月に入って気温も高目で比較的日照に経過したので、後期の肥大率は平年を大きく上回り後期肥大型を示し、病害虫の被害も例年より少なかったが、生育初、中期の干害が大きくそのため収量は平年且かやや不良となった。

なかったためである。

春植えばれいしよの作付面積と収穫量

	作付面積	前年差	10a 当り収量	作況指数	収穫量
全国	185,100	▲16,900	1,750	97	3,236,000
北海道	80,400	▲12,400	1,860	90	1,494,000
九州	14,100	100	1,610	109	227,400

昭和41年産だいずの作柄概況

夏だいず

播種期当時は平年よりやや低温気味に経過したが、発芽は平年並であった。播種後40～60日に当たる5月下

～6月中旬が日照は多かったが、低温のため分枝数がやや少なく、有効葉数が減少した。登熟期は日照が多く気温も高かったので登熟は良好で、干害の大きかった長崎および、収穫期に長雨の被害を受けた宮崎を除いて九州全域共作柄は良好であった。

秋 だ い ず

発芽は良好で、発芽後7月中旬から9月上旬までが高温・多照のため一部干害により生育が抑制されたが、開花期と登熟中後期の多照で病虫害は少なく、秋だいの作付の多い福岡・佐賀の作柄は良好であった。

県別の「だいず」収穫量と被害量

県 別	作付面積 ha	10 a 当量		作況 指数	被害面積		被害率	
		kg	t		ha	t	%	%
福 岡	1,190	127	1,510	106	739	63	4.4	
佐 賀	1,500	116	1,740	104	1,680	205	12.2	
長 崎	2,900	85	2,470	90	2,330	473	17.3	
熊 本	4,790	129	6,180	112	1,790	171	3.1	
大 分	2,870	109	3,130	100	1,320	125	4.0	
宮 崎	1,580	103	1,630	79	1,830	515	25.1	
鹿児島	2,170	114	2,470	108	1,960	287	12.5	

な た ね

作付面積：毎年減少をたどっているが、本年は、宮崎、鹿児島両県は別として大巾に減少した。この原因は収量が不安定で価格が安いこともあるが、本年は前作水稲の収穫期がおくれ、は種、植付期間の11月、12月が天候不順のため作付不能となったこともある。

なたねの作付面積および収穫量

県別	項目	作付面積		10 a 当量	作況 指数	収穫量	
		ha	%			kg	t
福 岡	岡 賀	5,230	59	117	90	6,120	
		2,750	41	100	78	2,750	
長 崎	熊 本	1,800	78	121	94	2,180	
		3,690	61	112	89	4,130	
大 分	宮 崎	2,310	77	125	100	2,890	
		2,480	98	129	107	3,200	
鹿 児 島	鹿 児 島	14,400	102	119	92	17,100	
		32,700	75	117	91	38,400	
九 全	園 圃	66,500	78	142	96	94,600	

作柄：作付は前作物の収穫期のおくれと11月、12月の天候不順のためのおくれ、とくに北部九州の田作では10日以上おくれ、初期の生育は悪かった。その後2月以降の高温により急速に茎葉は繁茂したが、総体的に分枝数は少なかった。開花期間中の3月下旬～4月中旬は全般的に低温で開花期間は延長され、主産地の鹿児島では3月30日の低温で凍霜害をこうむり全般的に着きや数は少なかった。登熟期間は高温・多照、寡

雨の天候で菌核病の発生は少なかったが蚜虫の発生が多く登熟はやや不良で九州地域の作況指数は91で作柄は不良であった。

果 樹

ミ カ ン

春の発芽以来順調な気象条件に恵まれて結実もよく大豊作が見込まれた。もちろん面積の増加による自然増の関係から、相当な増収をみたようではあるが、梅雨期の雨が著しく少なかったうえ、その後も大した降雨もなかったため、玉伸び悪く、とくに乾燥が肥大期に当たった早生温州は極端な小玉が多かった。また土増乾燥に伴う肥料の遅効きの関係から一般に甘味少く酸の多いものができた。しかし少雨のため浮皮は比較的少なかった。

本年1月中旬の酷寒および降雪により、ひどい寒害をうけたものが多い。とくに平地の新植が甚しい。またこの寒さにより夏ミカンなどの晩柑類は、果実に苦味を生じ甚しいものはスリ、続いて落果におよんでいる。

落 葉 果 樹

本年は一般に梅雨の雨が多かったため病害の発生が少く、ブドウ、ナシ、カキなど近年稀にみる豊作型であった。ブドウは適当な降雨により肥大もよく、赤うれなどの現象も少なかった。ナシでも病気が少く肥大もよかったため増収であった。しかし晩秋の降霜が早かったためカキやミカンの収穫に支障があった。

そ 菜

全般にそ菜生産は冬から春にかけて温暖、晴天が続いたため、春そ菜は豊作であったが、夏の乾燥と早い冬のおとずれで、秋冬作は影響をうけた。

まず、1月上・中旬暖かく、促成イチゴにウドンコ病の大発生をみ、暖地早出しイチゴ栽培と品種の統一化が叫ばれる端緒となった。1月下旬より2月上旬までやや低温が続いたが、以後温暖で果菜の苗の発育も十分であった。3月上旬冷雨が続き灰色カビ病の発生をみたが、以降晴天続きで温度高く、晩霜がなく、日照量が多かったためビニール被覆下の果菜類の発育はきわめて順調であった。

またアブラナ科の採種も4月上、中旬の晴天と、晩霜がなかったことで登熟よく、未付有の大豊作となった。

5月降雨少なく日照が多かったことは、トマト、ウリ類の大豊作となり、とくに関西地方の天候不順による不作と相まって、九州産果菜の出荷は順調で、関西市場における九州産果菜の地位を確立した。

6月中旬梅雨の到来で抑制果菜に病害が発生したが、7月以降降雨少なく軽微にすんだ。

7月下旬から8月下旬にかけてはほとんど降雨がなかったため、乾害が発生し、夏のカンラン、ハクサイの玉の伸びが悪く、根菜の肥大悪く、秋そ菜の播種がおくれ、苗物の発育が抑えられた。

9月中旬以降気温が下り、降雨は平年並であったため、9月まきの秋そ菜、抑制果菜の生育は順調で、ハクサイ、ダイコンは豊作となった。

11月中旬降雨が多く、11月下旬以降の冷え込み、降霜がひどく、ビニール抑制、促成果菜は低温による被害をうけ、とくに促成果菜の作付、作柄が案じられている。

花 き

冬を初夏にかけて順調な気候でほとんどの花きは平年作以上の生育であったが、梅雨から冬にかけては不順で種々の障害がみられた。

梅雨が例年に比し降水量が多く、観賞樹やきくの苗の活着率が低かった。きく苗ではビニール被いをしたものの活着はよかった。

8月を中心に高温乾燥で電照菊では育苗、定植後の生育が遅れ、その後の低温のため年末出しの間に合はなかったものが多くでた。カーネーションは高温、乾燥のためアブラムシの発生が多く、ウイルスの発病した地域があった。シクラメンでは夏季高温のためつばみの発達と発生が遅れ、年末までに開花しない株が非常に多くでた。

家 畜 飼 養

昭和41年には、九州での家畜飼養は各家畜について飼養農家数の停滞または減少、各家畜飼養農家1戸当たりの飼養頭数は増加の傾向がみられた。

豚は前年につづき頭数増がかなり大巾に行なわれ、全国的にも同じ傾向を示したので豚価格は低落し、年の後半に至り子取り用のす豚の頭数はいくらか減少した。肉牛は全国的な減少が昨年につづきみられたので、肉牛価格は高値をつづけ、繁殖意欲はいくらか高まった。

鶏は冬から春にかけてニューカッスル病が流行し、夏から秋にかけてやっと終息したが、一応順調な増加がみられた。乳牛も夏の記録的な暑さにより夏期泌乳量は低下したが、全体として僅かながら増加した。

多頭化に伴う飼料自給が不足したので購入飼料への依存度が増し、飼料価格は上昇の傾向を示した。

飼 料 作 物

1月、2月の気温は温暖で、適度の降水量もあり、3月下旬は平年を下まわる低温があり、上旬の温暖との関係で寒さの感じを強く受けたが、その後4月も温暖で適度の降水量もあったので、前年秋まきの牧草の春の生育は平年以上によかった。

5月は気温も高く、晴天日数が比較的多かったため、イタリアンライグラスなどの乾草調製作業は順調に行なわれ、品質良好な乾草が収かくされた。

4月および5月まきのトウモロコシ、ソルゴーおよびスーダングラスの発芽はよくそろい、その後の生育も順調であり、台風による倒伏の被害も全般的には少なかった。しかし、トウモロコシに対するダイメイチュウの被害は年とともに増加する傾向が認められ、全生育期間を通じてその発生をみた。

9月および10月まきの牧草や飼料カブの発芽生育は11月、12月の温暖多雨によって順調に経過した。しかし、人手不足のために、飼料用カブの適期間引きができなかったところでは根部の肥大が不じゅうぶんという結果がかなりみられた。

茶

一 番 茶

本年は2、3月の気温が平年より高日に推移し3月になってから雨も多くなったので発芽が促進され前年に比し3～10日早く発芽期にはいった。その後4月上旬の低温によって一時伸育を俵止したが、4月下旬から5月にかけて気温は上昇し、降水量も多く生育は回復し、摘採期日は前年より6～10日早かった。芽数は多いが芽重が軽く、収量は枕崎、姫野、八女は増収したが、勿覧、川南、熊本は減収であった。

二 番 茶

二番茶生育期間の気温がやや低かったため伸育は一時緩慢でなったが、6月下旬から気象条件もよくなり、前年より3～13日早く摘採期にはいった。一番茶と同様に芽数が多く芽重が少ない傾向を示したが、収

量はいずれも増収し、5～75%の幅があった。

三 番 茶

二番茶終了後は気温、降水量とも適当であったので、生育は順調に進んだが、7月中旬以降雨が少なく早魁状態となった。そのため仲育は抑制され発芽は不均一となり、摘採期日は前年よりおくれたところと早いところがあった。枕崎、嬉野は5～12日おくれ、知覧、川南、熊本、八女は1～11日早かったが、収量は嬉野以外はいずれも増収であった。

なお九州における著名茶産地の摘採期および10a当たり収量を示すと、次のとおりである。

地 名	一 番 茶		二 番 茶		三 番 茶		
	摘採期	収量kg	摘採期	収量kg	摘採期	収量kg	
崎 枕	H41	4.23	435.8	6.10	396.0	8.1	344.0
	H40	4.30	301.8	6.15	226.5	7.26	293.0
知 覧	H41	4.30	334.9	6.20	402.8	8.4	296.2
	H40	5.7	345.5	6.30	363.7	8.11	195.4
川 南	H41	5.9	540.0	6.21	522.0	7.24	407.6
	H40	5.19	612.0	6.28	464.7	7.31	352.0
熊 本	H41	5.6	575.0	6.23	551.0	8.1	500.0
	H40	5.18	643.2	7.6	523.8	8.12	396.0
嬉 野	H41	5.10	598.0	7.4	542.4	9.1	286.0
	H40	5.21	490.0	7.7	463.5	8.20	444.4
八 女	H41	5.14	521.6	6.30	533.2	8.10	391.0
	H40	5.21	394.6	7.5	346.2	8.11	381.0